



「手足の不自由な人はどう歩んできたか (人権思想の変遷と義肢・装具の進歩)」

武 智 秀 夫 著

著者は「義手」「義足」「装具」などの著書で知られ、また、これらの種類や歴史について幅広い豊富な知識を供えておられる武智先生である。

本著は、Ⅰ/義肢・装具の始まりと身体障害、Ⅱ/中世までの人権思想、Ⅲ/武器鍛冶の時代、Ⅳ/ルネッサンス期、Ⅴ/啓蒙思想と人権、Ⅵ/啓蒙思想と身体障害、Ⅶ/装具の先覚者達、Ⅷ/新しい義肢の出現、Ⅷ/戦争と産業革命、Ⅹ/装具や手術の進歩、Ⅺ/第一次世界大戦、Ⅻ/第二次世界大戦から現代へ、Ⅻ/日本の義肢・装具、Ⅻ/現在のわが国の問題点の項目で書かれ、さらに義肢・装具の基本概念についてと年表が付録としてある。

『本当に身体障害者のリハビリテーションを行うには、それらが生まれるに至った経緯を良く理解しなければならない。また今後、福祉の問題を考えて行く時、人類がこういった方面でどんな歩み方をしてきたかを知る事が、最良の糧になるのではないか』という考えの基に、

義肢・装具の変遷・発達と人権思想、医学、技術の発達の深いかかわりを身体障害者の立場から考察を加えてみている。

特に目新しい事や難しい事が書いてある訳ではない。しかし、リハビリテーションチームの一スタッフとして、このような知識を、背景に持っておく事は、著者も言っているように、今後の障害者福祉の問題を考えて行く上で、プラスとなるであろうし、また、このように、医学・科学や工学等の発達した中で、もう一度、原点に戻ってみる時が来ているのではないであろうか。

ギリシア神話を読むような感じで、サラッと読み流せる。

(B5, 182頁, 1,450円, 医歯薬出版, 1981)

(兵庫県リハビリテーションセンター
作業療法士 松田 美穂)

「子どもの発達と診断Ⅰ. 乳児期前半」

田 中 昌 人・田 中 杉 恵 著, (写真) 有 田 知 行

著者の田中昌人氏は、近江学園で精薄児教育の実践のあと、京都大学教育学部の助教授として活躍され、その間、全国障害者問題研究会を指導し、障害児教育の指導者として、現場の人たちに広く尊敬されておられる方である。私も、その説得力あるお話をきき、感銘を受けたことがあり、是非読んでみたいと思ってこの本を手にした。

本書は、著者の豊かな実践に基づいて書かれており、「新しい力の誕生——4か月児」、「乳児期後半への飛躍——6か月児」、「すこやかな発達のために」と三部に分かれている。発達の特徴と、32の観察項目とそれぞれの観察点が説明されており、読んでいて大変わかりやすい。有田知行氏の写真も子どもの表情や細かい手の動きなどが連続的にとらえられていて、乳幼児を扱っている人にとっては、それだけでも大変貴重な資料である。

目の動き、手の動き、全身の動きなどの記述に、臨床

的実践の中から子どもの発達をみつめてきた著者のするどい観察眼を感じとれる。おやゆびのひらきを3段階に分けて写真によって説明している所もわかりやすい。

神経発達の見方と関連させて本書をみると、なるほどと思われることが多くあり、乳幼児を扱っているセラピストにとっては大変示唆に富んだよい本であり、是非一読をおすすめしたい。

ただし、文中に出てくる「可逆操作」という概念は著者に独得な用語で、OT, PTにとっては多少とまどいを感じるかもしれない。四足坐位、半四足坐位、二足坐位という用語もユニークである。

続刊「Ⅱ. 乳幼児期後半」が楽しみである。

(B5版, 頁229, 大月書店, ¥2,000, 1981)

(国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院
作業療法士 鷺田 孝保)